

上田トシを話者としたアイヌの散文説話「カラスに育てられた男の物語」についての考察：ストーリー展開と交差対句の対比

大喜多 紀明

アブストラクト

本稿では、上田トシを話者とするウエペケレ「カラスに育てられた男の物語」の奥田による日本語訳文(奥田 1990, 169-200)をテキストとして、このテキストに見出される「話型(ストーリー展開)」と「交差対句パターン(この場合は「パターン①」(大喜多 2013a, 77-96))」とを対照した。その結果、本テキストにおいては、「ストーリー展開」と「パターン①」とが、互いに独立した領域を持つことが判明した。

ストーリーの展開は、インフォーマントの「意識下」で編成される。その一方、交差対句は、アイヌ民族の心性が反映した修辞表現である。本稿がもたらした知見は、本テキストの場合、ストーリーを構成しようとする話者の意識に基づく因子と、交差対句を構成しようとする民俗的な心性に基づく因子とがあり、その二種の因子が必ずしも一致しているわけではないということである。

キーワード：アイヌ民族、散文説話、口承テキスト、交差対句、話型

1. はじめに

本稿は、1987年9月に、平取町で録音された上田トシ氏(以下敬称略)を話者とするウエペケレ(散文説話)「カラスに育てられた男の物語」(奥田 1990, 169-200)の日本語訳をテキストとしている。筆者は、このテキストを分析することで得られた、話型に基づく奥田の知見(奥田 1990, 169-200)と、テキスト中に見いだされる交差対句パターンとの対比を行った。

この口承テキストの話者である上田について、奥田(1990)では次のように紹介している。

語り手の上田トシさんは、1912年10月1日、沙流郡平取町ペナコリの生まれである。父はペナコリの指導者であった川上サノウク氏であり、同じペナコリ出身の有名な語り手であった木村きみさんは、上田さんの姉にあたる。上田さんは長いあいだ上貫気別の入植地を切り開いてきたが、現在はお孫さんに囲まれて幸せな日々を送っておられる。

上田さんは、ずっと開拓に忙しかったため、ウエペケレなどは近年になって練習して語るようになったということである。にもかかわらず、その語りは古典的な様式感に溢れるものであり、天来の才能と多くの努力とがうかがわれる。国際的にも有名な沙流地方のアイヌ口承文芸の伝統は、木村さんをはじめほとんどの伝承者が亡くなった現在、上田さんによって支えられているといってもよいであろう。

なお、上田のプロフィールについては、アイヌ民族博物館(1997)にも書かれている。

ところで、アイヌ口承文芸についての研究は、古くは金田一・知里(1936)による萌芽期から近年に至るまで(例えば、中川 1987, 125-131)、多くの研究者の手によってなされてきた。アイヌ口承文芸の話型等の構造について扱った論文については枚舉にいとまがない(例えば、中川 2009; 大谷 2011, 19-89)。一方、筆者は、アイヌ口承文芸や談話資料にしばしば使用される交差対句について、一連の論文で提示してきた(例えば、大喜多 2011, 24-32; 2012, 147-158; 2013b, 104-126)。

話型ならびに交差対句は、共にテキストの全領域を覆う規模で見出せる「パターン」である。しかしながら、同一の口承テキストを題材として、話型と交差対句を比較対照する視点から扱った先行論文は現在のところ皆無である。本稿では、アイヌ口承文芸の一ジャンルであるウエペケレ(散文説話)の一篇「カラスに育てられた男の物語」を題材として、話型と交差対句の対比を行った。したがって本稿は、ウエペケレを題材として両者の対比を行うはじめての報告として位置付けられる。

物語のストーリーは話者の意図の下で構成されると言える。その一方で、交差対句の場合は、アイヌ民族の心性による影響下、おそらくは無意識に使用される修辞技法である。今回、上田のウエペケレの内の一篇を題材として、ウエペケレのストーリーと交差対句とを比較対照した。その結果、本テキストの場合は、ストーリーと交差対句とが互いに独立していることを示唆する知見を得た。

2. 奥田 (1990) による知見

本稿のテキストである「カラスに育てられた男の物語」について、奥田は次のようにコメントしている。

ここに紹介するウエベケレは、「主人公が動物神に育てられる—主人公が動物神の秘密を見る—動物神が真相を語って神の世界に帰る—主人公が人間世界に帰る—動物神の加護のもとに主人公の一族が幸福に暮らす」という、一つの典型的な話型をとっている。そして上田さんは、バランスの取れた構成と簡潔で緊張した表現によって、こうした形式を浮び上がらせている。

つまり、奥田が指摘した話型（ストーリー展開）は次の通りである。

◆話型

- ①「主人公が動物神に育てられる」
- ↓
- ②「主人公が動物神の秘密を見る」
- ↓
- ③「動物神が真相を語って神の世界に帰る」
- ↓
- ④「主人公が人間世界に帰る」
- ↓
- ⑤「動物神の加護のもとに主人公の一族が幸福に暮らす」

奥田 (1990) では、テキスト「カラスに育てられた男の物語」のストーリー展開が、大まかには、上記の①から⑤の順番であると書いているのだが、①から⑤の範囲が、具体的に、テキストのどの部分であるかということを明示している訳ではない。そこで、筆者は、奥田が示した①から⑤の領域を、具体的に、テキスト内の範囲として区分けした（本稿第3節）。

本稿では、筆者が単に「ストーリー展開」と書いた場合、奥田による①から⑤の「話型」を指している。なお、奥田は「カラスに育てられた男の物語」に確認される「ストーリー展開」を「一つの典型的な話型」（奥田 1990, 169-200）として評価している。

3. テキスト

本節では、テキスト「カラスに育てられた男の物語」を引用転記する。なお、本稿では、奥田による日本語訳文をテキストとしている。

アイヌ語構文と日本語構文では、語順の差異が基本的にはない（桃内 2005, 181-202）。このことから、本稿で話型と交差対句を対照する際に大きな支障がないと筆者は判断し、本稿では日本語訳テキストのみを使用した。なお、テキストには、筆者による丸番号および矢印、角括弧内のアルファベットおよび記号が施されている。

下記の例で示すように、テキスト中の、丸番号と矢印で囲われた範囲は、奥田による上記の①から⑤の「ストーリー展開」の各区分にしたがって筆者が区分けしたそれぞれの範囲を表している。

例：テキスト中での区分けで、①で示す範囲を表す場合。

①→・・・《文章》・・・←①

また、角括弧内のアルファベットで挟まれた箇所（例えば[A]と[/A]など）については、テキストに見出せる交差対句における各対応要素の範囲を示している。

例：テキスト中での区分けで、Aで示す範囲を表す場合。

[A]・・・《文章》・・・[A]

テキスト「カラスに育てられた男の物語」を以下に記す。

①→[A]私の母と私は暮らしていて、母はたいへん私を可愛がって何の不自由もしないで私は暮らしていた。そしてその母が昼になると山に行き、魚でも肉でもおいしいところを背負って帰ると、すぐに料理をしてそれからその魚でも肉でもおいしいところを選んで私に食べさせて、たいへん私を可愛がり可愛がりして暮らしていた。そして少し私が大きくなると小さな弓と小さい矢を作って私を遊ばせて、家の天井のほうへ家の壁のほうへその矢で私が射かけると、彼女は私に笑いかけてたいへん私を可愛がり可愛がりしながら暮らしているうちに少し私が大きくなると、[A] [B]どこからかシントコだの、何もない空っぽの家のようなところに私たちはいたのに、パッチだのシントコだのを母はどこからか背負って来てシントコだのパッチだのをたくさん家いっぱいにした。それからおれを背負って帰ってきてから、いっそう私を可愛がって暮らしていたのだが、[B] [C]もう私が少年になってからは、仕掛け弓でもどこからか持ってきてその仕掛け弓のし方も私に教えて、そして大きくなってから私が山に行きその弓を仕掛けると、鹿でも熊でも私は仕留めて、それを背負って帰るとそれから母はいっそう私を可愛がったりほめそやしたり、たいへんに私を可愛がりながら私たちは暮らしていた。いろりの火尻に、美しいパッチに蓋がしてあって火尻にあるのを私は見たいけれど、そのパッチを母が拭いて拭いて表面がびかびかするくらいそのパッチを大事にしていって、火尻にあるのだけれど、その蓋を取って見ることも考えずにいるうちに今や私は大きくなった。[C]←① ②→[D]けれども、こんなに私を可愛がる母が、それからは私と一緒に食事をしないでご馳走を作っても自分は食べもしないで私自身は食べさせられていたけれども、なんとも思わずにいたところ、ある日朝また母が起きて料理をしている音を聞いて、私が寝ながら見てみると、母がそのパッチの蓋を取ってそのパッチの蓋から何か指でなめているのが見えた。それから、人間ではないものなのでこのようにするのだろうかそこで初めて私は思っていたのだが、けれどもそのパッチの蓋を取って見もしないでいて、それからしばらくしてからまたある朝また私が目を覚ましていたところ、またそのパッチの蓋を取って指で何かなめているのが見えた。いぶかしく思っているうちまた山に行ってしまったので、その後でそのパッチの蓋を取って見たところ、そのパッチには糞が入って、入っていて、私は驚いて驚いて驚いていたけれど、すぐまた蓋を、蓋をしておいたのだが、[D] [E]夕方になって母が山からまた帰ってそして料理をして私に食べさせた。[E]←② ③→[F]母は汚れたままの格好でいて私に食べさせおわるとそれからこう言った。「これ、我が子よ、私の言うのを聞きなさい。私は人間だったわけではありません。ハシボソガラスの長の娘であつたのですが、子供がなくて、たいへん私は子供が欲しくて子供を可愛がりたくていたところ、ある日海のそばを歩いていると、お前の母がお前をおぶって浜に下りて、舟のへさきにお前を寝かせてそうして仕事をしていたそのあいだに私はお前をさらって来て、今までお前にくちづけしながら暮らしていたのだが、もう私は年を取って神の国に行きたいので、明日になったら神の国に行くつもりなので、そうしたら、近くに、この川下に大勢の村、大きな村があって、お前はそこの村のまん中にある人の息子であつて、彼には子供がなくて一人息子だけいたのに、浜にお前を寝かせたところを私がさらってしまったので、それからあちこち探してもお前が見つからないので泣いて寝ているのを私は見たいけれど、自分も子供を可愛がりたかつたのでお前をさらってきたのだが、今までお前を可愛がって可愛がったので、もう神のもとに私は行きますから、明日になったらお前は川下にさがって、お前の村に、この川下に村があるのでその村にお前は行って、村のまん中の大きな家にいる人がお前の父なのだから、そこで父を探しなさい。」と言った。私は驚くやら「こんなに私を可愛がった母なのに」と思って、ひどく私が泣くと、その母はその晩も私を抱いて寝て、そして次の日また料理をして立派な料理を作って私に食べさせて、お椀も洗ってからこう言った。[F] [F']「お椀でもここにあるシントコでも何でも、全部私が盗んで来てこうして積み上げてあるのだから、その父親をお前が探して父親を見つけたら村を治める人たちをお前は連れてきて、ここにあるシントコでもパッチでも、見覚えているものを私が盗んだものだから「これは私のものだ、これは見覚えがない」というだろうから、見覚えのあるものを全部持ってみんなが川下に下がってしまったら、この家はお前が火をかけて、それからお前の父のところで今からでも暮らしなさい。」と言った。私は驚いてそして次の日ほんと

うに起きて料理をして私に食べさせてお碗を洗い終わると、[F´] [E´]大きなカラス、ハシボソガラスになってカラスの鳴き声をしながら外にでたので、その後をすぐ「お母さん」といいながら私は外にでたのだが、どこに行ったのかもわからなくて、影もかたちも見えなくなって、そして私は泣きながら「私の母さん... 何があってもカラスであっても何であっても、あんなに私を可愛がって大事に育ててくれたのに」と思って泣きながら、[E´]←③④→[D´]不思議でならなかったがそれからすぐこんど川下に行ったところ、大勢の村、大きな村があってその村のまん中に大きな家があって、その家の外に私が行くと、その私の母であるのか、女の人が出てきて私を見てそして中に入れというのですぐ後について入ったところ、その私の父も、見たことがなかったけれど父である人なのか、？母と... 父と母のあいだに私は座って、私に見覚えがないかと尋ねたところ、「知らない」というので、「私は父さんの息子であって今まで育てたあげく、もうハシボソガラスの長は神の国に行ってしまう、「今からでもお前の父を探しなさい」と言いながらハシボソガラスの神は戻っていつてしまっ、そして私は川下へ下りてきたのです。」と言ったところ、「我が子よ」と両親は言いながら私を撫でながら泣きながら、私のことを喜ぶやら驚くやらして、そしてこういうわけだと私は話をした。舟のへさきに寝かせられていたのをさらわれて、[D´] [C´]今までハシボソガラスの長の娘が私を育てたことを私が物語ったので「本当に、そういうふうに私が寝かせて、ちょっとよそを向いていて振り返ったところもう子供はいなくて、それからどんなに探しても見つからないでいたのに」と両親は言って泣きながら私のことを喜んで、それからもう私は大きくなっているの、[C´] [B´]次の日すぐそのハシボソガラスの長が私を育てた家に私は親戚を連れて来て、そのいろいろなシントコだのパッチだの覚えのあるものを全部集めて、そしてすぐその家に火をかけてそれから川下へさがって、そして改めて「父さん、母さん」と呼びながら暮らしていたけれど[B´] [A´]いつまでも「あのハシボソガラスの母さんがあんなに私を可愛がったのに」と思って、そのハシボソガラスが私を可愛がったことを考えながら暮らしているうち、←④⑤→もう私は大きな少年になって、酒を作って「あんなに母さんは私を可愛がったのに、酒を作って、酒を作ったなら「まずい酒粕つまらないイナウでもハシボソガラスの神を祈るのです」とお前がいいながら私を祈ったなら、それだけでも神の国で私は立派な神になるのですよ」とカラスの母さんは言ったのだ」と私は思っ、酒を父が作って、それからその私の母、ハシボソガラスの神を供養することもしていた。そのうちに、美しい娘がどこからか来て私が一緒に暮らすと、すぐ彼女はお腹が大きくなって、子供もたくさんできたのを母も父も見ても子供を可愛がるだけ可愛がって、年をとって亡くなるまで可愛がり可愛がりしているうちに、母も父も亡くなってしまった。そのあとで、いつまでもそのハシボソガラスの神を私は祈っていてそしてやがて年をとって死ぬのである。」ということであるとある男が物語ったとき。[A´]←⑥

4. ストーリー展開

本節では、「ストーリー展開」の①から⑤に照応した、テキストにおける該当範囲についての概要を示す。

①主人公が動物神に育てられる

〔概要〕母と息子が暮らしていた。母は息子をととても可愛がっていた。家には何もなかったのだが、母がシントコやパッチを家に持って来た。母は蓋がしてあるシントコを大切にしていたが息子は特に気にしていなかった。

- ・・・この物語での動物神はハシボソガラスの神である。この箇所には母と息子の暮らしの様子が書かれており、息子は、母がハシボソガラスの神であることを知らない。

②主人公が動物神の秘密を見る

〔概要〕息子は、いつも母と一緒に食事を摂らなかったのだが、息子はこのことを特に不思議に思わないでいた。ところがある日、母が、パッチの中にあるものを指でなめて食べているのを息子が見た。母が山に行っている間、息子がパッチの中を覗いてみると、中に糞が入っていた。

- ・・・この箇所、息子は母の秘密を知る。母はパッチの中にある糞を食していた。

③動物神が真相を語って神の世界に帰る

〔概要〕母は息子に、自分がハシボソガラスの神であることを告げる。また、息子が本当の自分の子供ではなく、さらってきた子供であり、家にあるシントコヤパッチは盗んできたものであることを伝えた。その後、母はハシボソガラスになって、外にでていなくなってしまった。

・・・動物神（ハシボソガラスの神）である母は、自分の正体と事のあらましを語り、カムイモシリ（神の国）へと帰っていく。

④主人公が人間世界に帰る

〔概要〕母が息子に伝えたように川下の村の本当の父母のところへ行った。息子は事のあらましを本当の父母に伝えた。本当の父母と息子は、互いが親子であることを確認した。その後、親戚たちが、盗まれていたシントコヤパッチなどを取りに行った。息子は、自分を可愛がってくれたハシボソガラスの母さんのことを考えながら暮らしていた。

・・・この物語の主人公である「息子」が、実の父母のところに帰る。

⑤動物神の加護のもとに主人公の一族が幸福に暮らす

〔概要〕息子は成長し、ハシボソガラスの神に酒とイナウを供えた。その後、美しい娘と結婚をして子供ができた。息子はいつでも、ハシボソガラスの神を祈っていた。

・・・ハシボソガラスの神の加護のもとで、主人公とその家族が暮らす。

5. 交差対句および「パターン①」について

アイヌ口承テキストおよび談話テキストでは、修辞技法として、交差対句が汎用される。その中でも、「パターン①」と筆者が便宜上呼称する配列パターンが、いくつかのアイヌ口承テキストでは確認される。「パターン①」の事例については、大喜多（2013a）に資料として紹介した。「パターン①」に該当する構造を持つ口承テキストの事例は、大喜多（2013a）では、下記の5編が示されている。なお、筆者は、この「パターン①」が、アイヌ口承テキストに現れる交差対句パターンの中でも典型的なパターンの一つであると理解している（大喜多 2013a, 77-96）。ここで、「交差対句」という呼称については、大喜多（2013a）に準じている。

「小ザルが一匹」；田村（1986）

「和人の夫をもった石狩の女の話」；田村（1988a）

「人食いおばけ」；知里（1981）

「谷地の魔神が自ら歌った謡『ハリツ クンナ』」；知里（1978）

「小沙流の人」；田村（1988b）

ここで、「パターン①」は、次のような構成上の特徴を持つ。まず、テキストが交差対句形式で構成されている。また、この交差対句は合計5対の構成要素（Ⅰ～Ⅴ）からなる。それぞれの構成要素は次のⅠからⅤに示す通りである。

Ⅰ： 【緒言】（i） と 【結語】（i'） の対

Ⅱ： 【暮らしA】（ii） と 【暮らしB】（ii'） の対

Ⅲ： 【移動A】（iii） と 【移動B】（iii'） の対

Ⅳ： 【侵入】（iv） と 【退出】（iv'） の対

Ⅴ： 【緊張A】（v） と 【緊張B】（v'） の対

それぞれの構成要素は対になっている（例えば、Ⅰの場合はiとi'からなっている。）。5対の分類要素は、次のi・i'からv・

v´に示すような形式でテキスト中に現れる。

i → ii → iii → iv → v → v´ → iv´ → iii´ → ii´ → i´

このような構造様式を大喜多 (2013a) では「パターン①」と呼称した。本稿でもこの呼称を用いている。この「パターン①」を図式化すると次のように表現できる。

パターン①

i :【緒言】
 ii :【暮らしA】
 iii :【移動A】
 iv :【侵入】
 v :【緊張A】
 v´ :【緊張B】
 iv´ :【退出】
 iii´ :【移動B】
 ii´ :【暮らしB】
 i´ :【結語】

iには、物語の主人公の紹介もしくは、舞台設定が描かれている（【緒言】）。それに対して、i´は、物語の教訓や結論が書かれている（【結語】）。また、iiは、テキストに記された一連の出来事の前での暮らしの様子である（【暮らしA】）。一方、ii´は、一連の出来事の後での暮らしが描かれた箇所である（【暮らしB】）。iiiとiii´には、物語の主人公もしくは別の人物が移動する様子が配置される（【移動A】・【移動B】）。ivは、主人公やその他の人物に変化をもたらす「環境」に、主人公が侵入する場面である（【侵入】）。一方、iv´は、その場所から主人公が退出する場面である（【退出】）。vおよびv´は、は交差対句の中央に据えられ、主人公の「生命的危機」、もしくはそれに類する出来事が主人公にもたらされる場面である（【緊張A】・【緊張B】）。ここで、主人公は、命運が左右されるような分岐点を迎える。

6. パターン①の事例：「人食いおばけ」の場合

本節では、実際の「パターン①」の事例として、「人食いおばけ」の場合について紹介する。テキスト「人食いおばけ」自体は知里 (1981) に掲載されている。本節は、大喜多 (2013a) に記載された、知里の「人食いおばけ」を分析した知見を引用している。なお、テキストに施された角括弧内のアルファベットおよび記号は筆者による。

[A]私はウラシベツの村に姉さんと二人で暮していた。姉さんは神さまのように美しい人だった。そして、自分から言うのもなんだが、私も負けないくらいの美人だった。[/A]

[B]ある日、姉さんとふたりで、囲炉裏を中にはさんで針仕事をしながら、四方山嘯をしていると、[/B] [C]もう日も暮れようとする頃、戸外に人の歩く足音がして、[/C] [D]誰か咳ばらいをしながら入って来た。見ると恐しく背の低い、色の黒い、みっともない顔の男で、私のうしろを通過して横座にどっかと腰をおろし、そのまま何を言うでもなく、何をするでもなく、私たちの上をじろじろ見ながら大あぐらをかいて坐っているのだった。姉さんも私も知らんふりをしていた。[/D]

[E]やがて日も暮れたので、姉さんが立って夜食のしたくをととのえ、私のお膳を私の前にすえ、自分のは自分の前において、どこから捜し出したのか、ぶっ付けお椀の底にちよっぴり食物を入れて、小男の前におしやった。

私たちがせつせと食べていると、小男は私たちの健啖ぶりを呆れ顔に眺めていたが、[E] [F]やがて言うことには、

「これ女ども、見ているとお前らの上の口は、恐しく食いしん坊のようだが、下の方の口はどうなんだい？」[F]

[F´]すると、よもや姉さんがそんな返答をしようとは思わなかったのに、

「ええ、ええ、下の口だって食べますよ。でも普通食物じゃ満足しないんです。私たちの下の口の食べものは人間、それも生きた男の人ばかり……。[F´] [E´]背の高い男の人なら、呑めば足だけ外へ残るけど、背の低い男の人なら、丸呑みにしてしまうんですよ」[E´]

[D´]それを聞くやいなや、小男はいきなり立ちあがって、あわてて戸外へ飛びだし、[D´] [C´]どこかへ消えてしまった。
[C´]

[B´]そのあとで、姉さんは腹を抱えて大笑いをしながら、言うことには、

「これ妹、よくお聞き。私は小さい時から巫力にたけていて、偉い神さまでも偉くない神さまでも、魔物たちでも、どこで何をしているか、いながらにしてよく分るのです。この人間の国の背後の山の中に、カワウソの魔が兄弟二人で住んでいて、神々の中にも気に入るような娘が見つからないので、人間の国を見わたすと、私たち二人の美貌が目にとまったのです。そこで私たちを殺して魂を奪って妻にしようと、神々の目を盗んで山を降り、兄の方は村の背後に隠れて、弟だけここへ来たのです。ところが私があんなことを言ったものだから、魂が壊れ落ちるほどびっくりして、兄の隠れている所へ息せき切って駆けつけ、

“人間の女どもが普通の食物を食うなら、痛くもかゆくもないが、男を食うんだそう。しかも背の低い男だと、丸呑みにしてしまうというから、俺たちなんかは丸呑みの範疇に属するわけだ”

と復命すると、兄もびっくり仰天して、

“そいつは陰呑な話だ。危なくメノコの下の口に丸呑みにされるところだったわい”

と言って、二人で逃げてしまったのです。[B´] [A´]魔などというのは他愛もないもので、諺にもあるとおり、言われたことをそのまま信じこむものだから、私たちの下の口が生きた男の人を食うなどという、とんでもないでたらめにだまされて、今はもう遠い遠い所へ逃げてしまったから、これからは何の恐いこともありません」[A´]

このテキストには以下のような交差対句を確認できる。

- A 姉妹の紹介
- B 姉妹の暮らし（姉妹の四方山嘯）
- C 足音が近づいてくる
- D 小男が家に入ってくる
- E 姉妹の健啖ぶりに驚く小男
- F 「下の口」はどうだ？
- F´ 「下の口」についての説明
- E´ 人を丸呑みにする「下の口」
- D´ 小男が家から出て行く
- C´ どこかへ消えてしまう
- B´ その後の暮らし（姉から妹への言葉）
- A´ これからは恐ろしいことはない

ここで見出された交差対句を「パターン①」にあてはめると以下になる。

◆パターン①と「人食いおばけ」の対比

〈パターン①〉	〈テキスト〉
i : 【緒言】	: A
ii : 【暮らしA】	: B
iii : 【移動A】	: C
iv : 【侵入】	: D
v : 【緊張A】	: E・F
v´ : 【緊張B】	: E´・F´
iv´ : 【退出】	: D´
iii´ : 【移動B】	: C´
ii´ : 【暮らしB】	: B´
i´ : 【結語】	: A´

ここで、vおよびv´では、それぞれ、交差対句におけるE・FおよびE´・F´という複数の要素が対応している。このような、「パターン①」における構成要素のそれぞれに対して、交差対句における複数の要素が該当する事例は、他のテキストの場合にもしばしば確認される。

7. テキストに見出される「パターン①」

さて、本稿第3節でテキスト「カラスに育てられた男の物語」に付したアルファベット箇所を配列すると次のようになる。

交差対句

- A 母と息子の暮らし
- B シントコやパッチを持ってくる
- C 息子が成長する
- D 母の行為に対しての疑念→糞を食べていた
- E 母が山から家に帰ってくる
- F 母が正体を告げる
- F´ 母がシントコとパッチを盗んだことを告げる
- E´ 母がハンボソガラスになり家から出る
- D´ 息子がわからない父母→息子を認識する父母
- C´ 息子が成長した経緯
- B´ シントコやパッチを戻す
- A´ その後の暮らし

Aは、物語に記載された、「一連の出来事が生じる前」の段階における、ハンボソガラスの母と主人公の息子との暮らしの様子が描かれている。同時に、この物語の緒言箇所でもある。したがって、Aはi【緒言】とii【暮らしA】に相当している。それに対して、A´には、主人公のその後の暮らしが描かれている。この箇所は、物語の結語でもある。したがって、A´はi´【結語】とii´【暮らしB】に相当する。

Bには、ハンボソガラスの母がどこからかシントコやパッチを持って来た様子が書かれている。これは、後述されるように、ハンボソガラスの母が盗んできたものであった。一方、B´は、主人公の親戚たちが、盗まれていたシントコやパッチを取り戻す場面となっ

ている。このBとB'はii【暮らしA】とii'【暮らしB】である。

Cには主人公である息子が成長する様子が書かれている。それに対して、C'は、主人公が成長した過程を回想する場面である。このCとC'もii【暮らしA】とii'【暮らしB】に該当する。

さて、DとD'には「疑問」と、その「疑問」が「解決」される様子が書かれている。

《疑問》	《疑問を持った人》	《疑問の解決》
D パッチの中身は何か？	主人公	中身は糞であった
D' この男は誰か？	本当の父母	男は自分たちの息子であった

Dは、主人公がパッチの中身に疑念を抱き、中身を確認する場面である。それに対し、D'は、主人公の本当の父母が主人公と対面するのだが、主人公が自分たちの息子であることがわからない状態が書かれており、その後、息子であることが確認される場面がある。

筆者は、ここでのDとD'がiii【移動A】とiii'【移動B】に該当すると解釈した。このことについては後述する。

Eは、ハシボソガラスの母が山から家に帰ってくる場面である。一方、E'はハシボソガラスの母がハシボソガラスの姿に戻って家から外にでていく場面である。ここでのEとE'は、ハシボソガラスの母が家に入出する場面が書かれている。Eでは、ハシボソガラスが家に帰ってくことで、息子とハシボソガラスの命運を決する場面へと侵入する。一方、E'はこの緊張感のある場面を終えた後に、ハシボソガラスの母が家の外へと退出する様子が描かれている。したがって、EとE'はiv【侵入】とiv'【退出】に相当する。

F・F'には、ハシボソガラスの母が、自分の秘密を主人公に告げる箇所である。この箇所を通じて、ハシボソガラスの母と主人公である息子の命運が大きく変化する。このFとF'箇所は、それぞれv【緊張A】とv'【緊張B】である。

以上を整理すると次のようになる。

i	：【緒言】	：A
ii	：【暮らしA】	：A・B・C
iii	：【移動A】	：D
iv	：【侵入】	：E
v	：【緊張A】	：F
v'	：【緊張B】	：F'
iv'	：【退出】	：E'
iii'	：【移動B】	：D'
ii'	：【暮らしB】	：A'・B'・C'
i'	：【結語】	：A'

ここで筆者は、DとD'に配置された出来事を【移動A】および【移動B】とした。通常、「パターン①」の場合、ここでの【移動A】・【移動B】には、主人公もしくはそれ以外の人物が物理的に移動する様子が配置されている。しかし、本テキストにおいては、DとD'に、物理的な移動の様子は書かれていない。むしろ、ここでのD・D'では、心の変化の様子が書かれている。例えば、Dでは、主人公が母に疑念を抱き、それが解決することで【緊張A・B】の場面へと導かれる誘因となる。一方、D'では、本当の父母が息子を理解できない状況から理解できる状況へと変化することで、後の新しい生活へと導かれる誘因となる。したがって、DとD'は、共に、認識の変化が、新しい関係性を構築するための誘因となる箇所である。この箇所には物理的な移動はないが、認識が変化して新しい状況へと移行するという意味で、筆者はD・D'を【移動A】・【移動B】と位置付けた。

8. ストーリー展開と交差対句の対比

本節では、第 4 節で紹介した「ストーリー展開」と第 6 節で示した交差対句とを対比する。なお、第 6 節で示した交差対句は、交差対句のパターンの中でも代表的なものの一つとして筆者が理解している「パターン①」に該当している。ここでは、「ストーリー展開」の区分に相応する交差対句の要素をそれぞれ示した。

<u>「ストーリー展開」</u>	<u>交差対句の要素</u>
①主人公が動物神に育てられる	A・B・C 【緒言】(i)・【暮らし A】(ii)
②主人公が動物神の秘密を見る	D・E 【移動 A】(iii)・【侵入】(iv)
③動物神が真相を語って神の世界に帰る	F・F'・E' 【緊張 A】(v)・【緊張 B】(v')・【退出】(iv')
④主人公が人間世界に帰る	D'・C'・B'・A' 【移動 B】(iii')・【暮らし B】(ii')
⑤動物神の加護のもとに主人公の一族が幸福に暮らす	A' 【暮らし B】(ii')・【結語】(i')

上記の「ストーリー展開」の区分と交差対句の要素（ここでは「パターン①」）との対比を瞥見する限り、この両者は互いに独立していると判断できる。

ここで、テキストの「ストーリー展開」は、話者である上田の意図の下で編成されたことは明らかである。しかしながら、本稿で示したテキストでの交差対句の要素の配列を見る限り、「ストーリー展開」とは関係がない。一例をあげれば、ハシボソガラスの母がシントコやパッチを持ってくるエピソードが B 箇所配置される必然性が、B' との対応という理由から生じる。ところが、ストーリー展開では、このエピソードがこの箇所に配置される必要性が乏しい。むしろ、このエピソードを他の箇所に配置する、もしくは仮に割愛したとしても、ストーリー展開上の大きな矛盾はない。このことは、上田がテキストを構成する上で、ストーリーを組み立てようとする「意図」(=α)と、それとは独立した、交差対句パターンを構築しようとする「意図」(=β)という二種類の因子が存在することを示唆している。

9. おわりに

本稿では、上田によるウエベケレ「カラスに育てられた男の物語」に確認された奥田による「ストーリー展開」と、筆者による交差対句（ここでは「パターン①」）とを対比した。その結果、本テキストに関して言えば、この両者が独立していることがわかった。このことは、テキストの場合、ストーリーの構成や「語」・「句」・「節」の配置に影響を与える因子として、少なくとも以下の 2 種類（αおよびβ）があることを示唆している。

(α) : ストーリーを編成しようとする話者の心性

(β) : 交差対句を編成しようとする話者の心性

ここで、(α) はストーリーを論理的に構成しようとする意識的かつ知的な作用に基づいている。その一方、(β) については、無意識もしくはそれに近い状況で使用される、民俗的な心性の発露に基づく修辞技法であると筆者は推測している。本テキストの場合には、αとβが、テキストの構成に対して独立して作用している。

無論、ストーリー展開の区分と交差対句との関係性を議論する際、本稿の知見のみを根拠として判断することはできない。むしろ

今後多くのアイヌ口承テキストを題材として確認しなければなるまい。筆者としては、今後も引き続き、他の口承テキストについての調査を行う予定である。

引用文献

- アイヌ民族博物館, 1997『アイヌ民族博物館伝承記録3・昔話 上田トシのウエペケレ』, アイヌ民族博物館
- 大喜多紀明, 2011「『アイヌ神謡』の修辭パターンから心意を辿る(上) — 「交差対句」を糸口として—」『西郊民俗』217号, 24-32, 西郊民俗談話会
- 大喜多紀明, 2012「『アイヌ神謡集』に掲載されたカムイユカラについての考察—修辭論的視点より—」『人間生活文化研究』22号, 147-158, 大妻女子大学人間生活文化研究所
- 大喜多紀明, 2013a「アイヌ口承テキストに確認される2種類の修辭型列パターンについての資料」『人間生活文化研究』23号, 77-96, 大妻女子大学人間生活文化研究所
- 大喜多紀明, 2013b「知里幸恵の『アイヌ神謡集』に掲載されたカムイユカラにおける交差対句資料—アイヌ民族の修辭技法」『国語論集』10号, 104-126, 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室
- 大谷洋一, 2011「和人の散文説話—継母から殺されかけた姉を救った妹—」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』17号, 19-89, 北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 奥田純己, 1990「アイヌ口承文芸(1): 上田トシさん口演「カラスに育てられた男の物語」」『札幌学院大学人文学会紀要』47号, 169-200, 札幌学院大学
- 金田一京助・知里真志保, 1936『アイヌ語法概説』, 岩波書店
- 田村すず子, 1986「サダムさんの昔話: 沙流方言: 民話5」『アイヌ語音声資料』3号, 28-31, 早稲田大学語学教育研究所
- 田村すず子, 1988a「二風谷の昔話と歌謡・神謡: 民話5」『アイヌ語音声資料』5号, 74-81, 早稲田大学語学教育研究所
- 田村すず子, 1988b「二風谷の昔話と歌謡・神謡: 神謡」『アイヌ語音声資料』5号, 67-73, 早稲田大学語学教育研究所
- 知里真志保, 1981『アイヌ民謡集』, 岩波書店
- 知里幸恵, 1978『アイヌ神謡集』, 岩波書店
- 中川裕, 1987「アイヌ語研究とフォークロア——アイヌ口承文芸の文体(はなしことばとその周辺〈特集〉)」『国文学解釈と鑑賞』, 52巻7号, 125-131, 至文堂
- 中川裕 編, 2009『アイヌ語韻文表現法』, 千葉大学大学院人文科学研究科
- 桃内佳雄, 2005「アイヌ語と日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成と対訳パターン」『北海学園大学工学部研究報告』32号, 181-202, 北海学園大学工学部